

教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	上智大学	申請分野(系)	人社系
教育プログラムの名称	現地拠点活用による協働型地域研究者養成		
主たる研究科・専攻名	グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻		
(他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科専攻名)			
取 組 実 施 担 当 者	(代表者) 赤堀 雅幸		

[教育プログラムの概要]

キリスト教ヒューマニズムを基軸とする建学の精神を生かし、高い国際性を誇る外国語学部の語学教育と地域研究の伝統の上に立つ地域研究専攻は、平成9年度に開設され、「アジア・中東・ラテンアメリカ地域等の内在的な理解を重視する地域研究」を目的としている。

平成18年度に外国語学研究科から新たに開設されたグローバル・スタディーズ研究科に移行し、その目的も今日の時代状況に即して「普遍的な現代世界の課題に取り組む活動の一環として構想される地域研究において、グローバルな市民社会とローカルの多様性を支える次世代研究者および高度専門職業人」を養成することに限定して規定されることとなった。

本教育プログラムはこの養成目的の達成のために、以下のような考量に基づいて構想される。

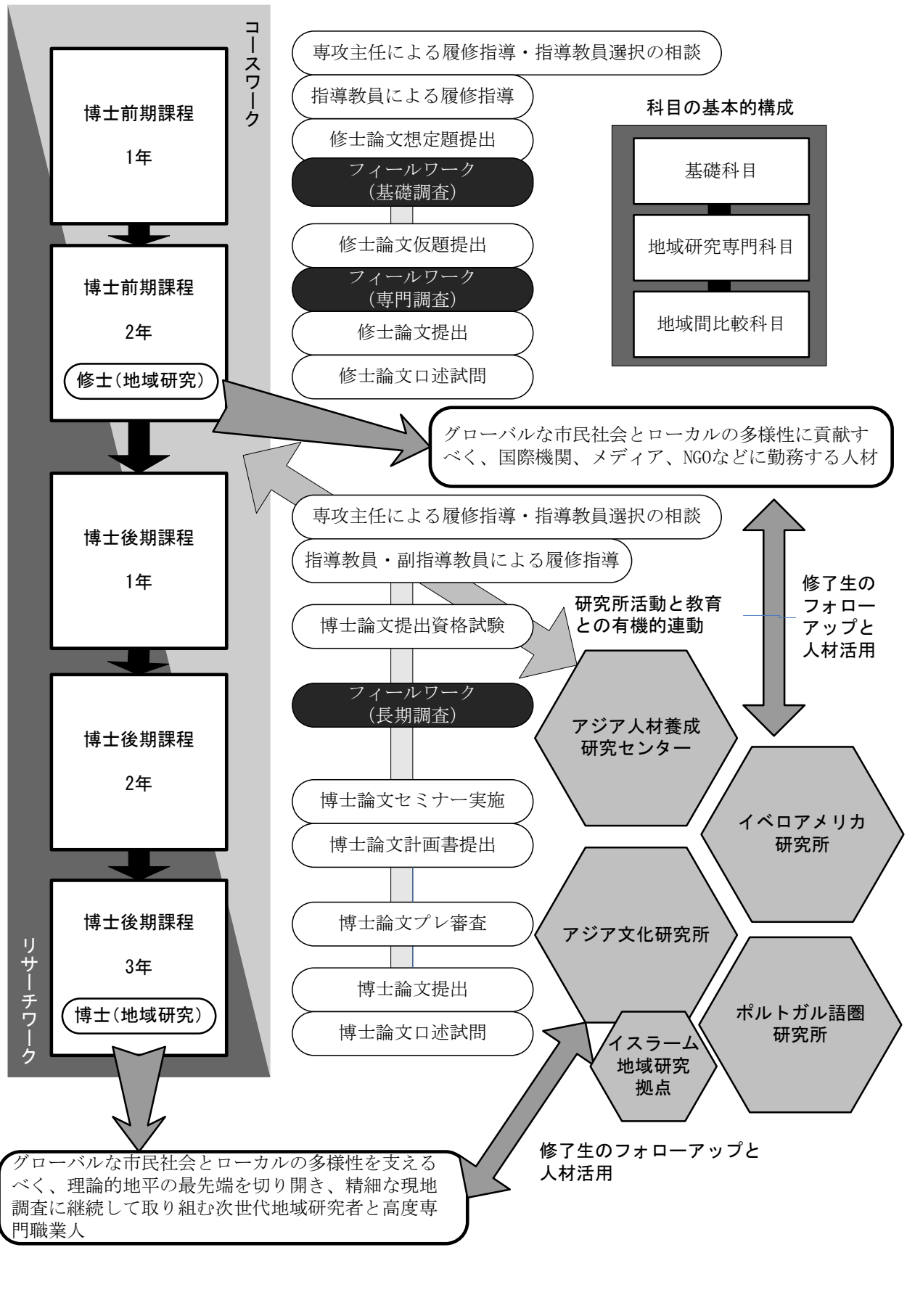
- 1) 現代世界に貢献する公共的知識人としての地域研究者という方向付けを徹底する。
- 2) この方向付けの実現のために、研究地域の人々を単なる理解の対象としてではなく、それぞれの立場から一つの問題に取り組むべく「協働」するパートナーとしてとらえる姿勢を学生に徹底する。
- 3) このような姿勢を育む場として、フィールドの現場を重視する。
- 4) 教育課程上、博士前期課程の「フィールドワーク(基礎調査)」「フィールドワーク(応用調査)」の制度的洗練と標準化、博士後期課程のフィールドワーク(長期調査)サポート態勢の充実に力を注ぐ。

広い意味での「フィールド力」を強化するプログラムとして、現地での教育活動の場として恒常的な現地拠点を設けることが最重要であり、その際にはカンボジア王国シェムリアップに本学が有するアジア人材養成研究センターがモデルとなり、それぞれの地域の状況に応じて、柔軟な手法でこれに相当する拠点の形成を実現するよう努めることになる。この現地拠点形成に有効に働くのは、本学が全世界に有する133校の交流協定先であり、学部レベルでの2校間交換留学協定に留まっていたそれらを、大学院レベルでの学術交流協定に拡大して交流を実質化し、さらに上述の現地拠点の仲介により、有機的なネットワークとして結びつけることで本専攻の教育への有効活用が可能となると思われる。

ただし、ここで目指されているのは、いたずらに体験主義的な現地調査ではない。調査対象の人々との間に双方向的な関係を意識的に築き上げるのに必要な事前の準備が十分に果たされていることが大前提である。すなわち、調査現地の言語の習得や現地に関する深い知識の獲得、特定学問分野の方法論の熟知、貧困、開発、人間の安全保障などの今日的で普遍性の高い問題についての理解が充分になされて初めて、フィールドという場は実践的に機能し、そこから有意義な結論や結果は導き出される。さらには、現地調査と論文執筆に必要な競争的資金を獲得することを含めて、自主的に調査研究計画を立案する力、これを現地政府、諸機関との折衝を含めて実施する調査研究の実施力、その成果を国際言語としての英語等を利用し、情報機器を援用して教育研究上に表現していく生産力の向上といった、きわめて実際的な能力の向上もまた重要であることはいうまでもない。

上智大学：現地拠点活用による協働型地域研究者養成

履修プロセスの概念図 (履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。)



< 採択理由 >

大学院教育の実質化の面では、「グローバルな市民社会とローカルの多様性を支える次世代研究者および高度専門職業人」の養成を目的に掲げ、体系的な地域研究の方法論や関連科目群、フィールドワークによる充実した教育課程が編成されている点は評価できる。

教育プログラムに関しては、海外拠点の活用による協働型地域研究者養成のために、広い意味での「フィールド力」強化を目指したものとなっており、地域研究に要請されるフィールドワークの技能を身に付けさせるための意欲的なプログラムとして評価できる。また、実施体制の上でも、既存の海外拠点のみならず、新たなネットワークの整備が進みつつあるなど、長年にわたる大学の教育研究活動の実績を活用する計画となっており、高い実現性が期待できる。更に、大学としての支援体制も十分に計画されており、支援期間終了後の自主的・恒常的展開が期待できる。